１－９	様式２

主題	認知症デイホームに求められているもの ～地域に根ざしたデイサービスとは（PART1）～
副題	精神科医を交えた勉強会・事例検討会のこれまでの効果

認知症ケア	人材育成

研究期間	６０ヶ月	事業所	みのわ高齢者在宅サービスセンター

発表者：石田　須美子（いしだ　すみこ）	アドバイザー：土田病院　遠藤真実
共同研究者：氏名　大関博子　山口美枝	

電　話	０３（５６０３）２２４５	メール	zai-mino@bz03.plala.or.jp
ＦＡＸ	０３（５６０３）２２４０	ＵＲＬ	http://www.minowa-toku.com/

今回発表の事業所やサービスの紹介	平成６年７月１日に台東区で最初の認知症専門デイとして開設。台東区社会福祉事業団が母体で、現在は定員１２名、台東区の北部、日比谷線三ノ輪駅から徒歩１分の場所の三ノ輪福祉センターの中にある。認知症デイの隣に４５名の一般型デイが併設されている。また施設内に特別養護老人ホーム、地域包括支援センター、訪問介護、居宅介護支援事業所を併設している。

《１．研究前の状況と課題》

区内で認知症高齢者が増加している中で、認知症であっても、一般型デイホームを利用し、一般型デイでのグループ活動が困難になってはじめて認知症デイを利用する傾向が高い。実際に、個別対応が必要な方や対応が難しい方が多く利用していた。

⇒認知症デイにおける認知症ケアについて、職員がより専門的な視点でサービスが提供できるようにする必要があった。

⇒職員の認知症ケアに関する専門性を高めるため、平成９年４月から、区内の精神科の医師を講師に招き「認知症」は病気であるということから、症状について学び事例検討会を定期的に実施するようになった。

《２．研究の目標と期待する成果・目的》

認知症デイに求められているものは何かを明らかにし、一般型デイでは出来ない、認知症ケアを実践し、認知症状にあった、利用者が安心安全に穏やかに過ごせるデイを追求し、認知症デイの意義を立証していく。

当初の目標

① 現状分析
② 職員の認知症ケアのスキルップ
③ 家族・ケアマネジャーの信頼獲得

《３・具体的な取り組みの内容》

１．「現状分析」

利用者・職員体制・設備・提供プログラム地域ニーズ・競合施設の状況を分析し、特に通所介護計画書の利用者、家族の意向をしっかりモニタリングしサービスに反映させた。

２．「職員の認知症ケアのスキルアップ」

精神科医を交えた勉強会・事例検討会を定期的に開催し、職員の認知症に関する知識を学習し、事例検討会を通して、精神科医から助言をもらい、個々の利用者のにあった認知症ケアを実践した。それらをまとめた、「認知症ケア推進プログラム」を作成した。

 ※無断転載・複製を禁じます

３.「家族・ケアマネジャーの信頼獲得」

・事前にキャンセル利用の希望を聞き、欠席者があるときは利用日でなくてもデイの利用が可能な旨を伝え、また家族の都合で臨時に利用したいときにも臨機応変に利用していただいた。また、常時、個別対応が必要な方や包括的支援が必要な方などを積極的に受けてきた。

・送迎にはデイの職員が添乗員となり、家族より日々の状況を情報収集し、デイからの状況を正確に伝えることで家庭とデイとの一連の介護を行えるように努めた。

・ケアマネジャーに、一般型デイと認知症デイの違いについて実例を挙げながら説明し、実際に認知症デイの活動の様子を見てもらい、認知症デイの理解を深められるようにした。また、提供表を持参時には空き情報を知らせ、月事報告書にはデイ利用時の様子を記入して渡した。

《４．取り組みの結果と考察》

１・本人の状態に応じたモニタリングをすることにより個別性に合わせた介護・アセスメントが可能となり、利用者も徘徊や不安の訴えも少なくなり落ち着いてデイを過ごせた。デイでの落ち着きはご自宅でも落ち着いて過ごせることにつながり家族の介護負担につながった。

２・デイの様子を通信や行事毎の写真等で家族に伝えることで視覚的にも利用者様の様子が伝わった。中には自宅で見たこともない笑顔の写真を見ることができ、安心感につながったと思われる。

３・勉強会・事例検討会を行うことで、認知症ケアに対して、職員が自信を持って対応できるようになり、職員の入れ替えがあっても、「認知症ケア推進プログラム」を基に安定したサービスを提供できるようになった。

４・認知症だから、認知症デイの利用でなく、認知症状にあった、一般型、小規模型等のデイホームの提供が可能となった。

５・結果、当施設の認知症デイが、専門的な視点でサービスが提供されている事が、地域の中で浸透し、ケアマネジャーからの信頼を得て、新規の申し込みも安定的にあり、高い利用率を維持できるようになった。

【過去５年間の利用率推移】

２０年	２１年	２２年	２３年	２４年
82.7%	84.7%	80.4%	88.4%	90.4%

《５．まとめ、結論》

精神科医を交えた勉強会・事例検討会を定期的に開催して１６年間、この間、利用者、職員の入れ替わりもあったが、認知症ケアの根幹は変わることなく、精神科医との関わりが、認知症ケアの専門性を維持してこられた要因であると考える。

認知症デイの求められているものは、特別な取り組みではなく、認知症の正しい知識と、認知症ケアの基本の繰り返しであり、地域で認知症になっても安心して暮らせるためには、利用者を取り巻く環境、家族、ケアマネジャーとの連携が欠かせません。そういった、あたりまえの事を、継続していくことが、地域の根ざしたサービスの一歩と考える。

《６．倫理的配慮に関する事項》

本研究発表を行うにあたり、ご本人・ご家族に口頭で確認をし、本研究発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《８．提案と発信》

家族との意見交換より、いつまでも在宅で生活していくために、自宅での関わり方に不安を抱いている家族が多い。今後はデイのみならず地域にも職員が学んだ知識・技術を還元していくことが必要である。このことが住み慣れた地域でいつまでも自分らしく生きていくことに大きく繋がっていくと思う。

【メモ欄】

 ※無断転載・複製を禁じます